様式　Ｃ－７２－１

令和４(2022)年度科学研究費助成事業(科学研究費補助金)
実績報告書(プログラム実施報告書)
(研究成果公開促進費)「研究成果公開発表(B)
(ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI)」

課題番号：　22HT0031
プログラム名：　見て触って「プラクティス」で考える哲学

所属研究機関	名称	筑波大学
	機関の長職・氏名	学長・永田　恭介
実施代表者	部局	人文社会系
	職	助教
	氏名	土井　裕人

開催日	受講対象者	交付申請書に記載した募集人数	当日の参加者数
令和４年 11 月 23 日	□小学校５年生　□小学校６年生 ■中学校１年生　■中学校２年生　■中学校３年生 ■高校１年生　■高校２年生　■高校３年生	30 人	９人
実施場所	筑波大学		

プログラムの目的

実施代表者は、思想研究に視覚化と可触化という新しい手法を導入することで人文学の方法論の刷新を目指し、専門の研究者だけでなく初学者にも人文学の魅力や面白さを伝える手法を、科研費による研究で確立してきた。特に、文献を基にして扱われてきた抽象的な内容を感覚できる対象にして表現することは、あらゆる学問に共通する「考える」ことの魅力や面白さを提示できる重要な方法であり、本プログラムにおいて受講生に紹介する主な内容となる。併せて、受講生各自が自由に発想し考えた内容を共有する実習やワークショップもさらに充実させ、哲学や思想のプラクティスまで視野に入れた、科研費のアウトリーチとして意義のあるものとするのが、このプログラムの目的である。

プログラムの実施の概要

本プログラムは、人文学における新たな展開として確立しつつある人文情報学（デジタル・ヒューマニティーズ）を背景とし、実施代表者の科研費による研究を紹介しその内容を受講者に体験してもらうことで、人文学はじめ広く学問への関心と理解を深めるものである。そのため、講義パートとして本

プログラムの基盤となっている科研費について受講者に紹介した上で、人文学の基礎となる考え方も踏まえながら、哲学や思想の実例から講義を行った。併せて、実施代表者の特徴的な研究人生にも触れることで、科学への興味関心を持って生きることの意義を伝え、進路に迷っていたり理工系の進路を視野に入れていたりするような受講者にも、わかりやすく有益なものとなるよう考慮した。

実験・実習パートでは、哲学・思想の文献から重要な概念をコンピュータにより視覚化して 3D プリントしたモデルも用いて実演を行った。それを踏まえ、受講者の日常的な気づきから発したアイデアや思考を引き出したうえで、哲学のプラクティス（実践）に向けて共有し議論する「アンカンファレンス」の手法を実習に取り入れた内容でプログラムを実施した。昨今の状況では何かを手に取って順番に回すようなワークショップは行いにくいため、接触の少ないワークショップとなるよう配慮を行って実施した。

・プログラムの留意点、工夫した点

本プログラムは哲学のプラクティスに関するものであるが、単なる座学にならず、受講生が自分の考えや意見を遠慮せずに共有できるよう、よい雰囲気を作ることが従来からの留意点であった。これについてはコロナ禍で様子が変わってしまったと考えられたため、以前のように受講生が自ら活発な活動ができるよう、プログラムの進行には改めて注意を払った。特に、違う学年や学力の生徒が一緒に参加するプログラムであるので、バックグラウンドの違いがあっても知的に楽しい体験を共有できるよう、各参加者と直接話をする機会を設け、その中では受講者それぞれの着眼点をほめながら進行するといった工夫を行っている。

・当日のスケジュール

10:00～10:30　受付
10:30～11:00　イントロダクション・科研費の説明
11:00～11:15　休憩
11:15～12:00　講義「見えないものを考えて、新たな世界を開く」
12:00～13:30　昼食・休憩
13:30～14:15　実習①「哲学・思想を「見て」考えてみよう～二次元と三次元から～」
14:15～14:30　休憩
14:30～15:15　実習②「哲学・思想を「触って」考えてみよう～「考える」を拡張する～」
15:15～15:30　休憩
15:30～16:15　ワークショップ・ディスカッション
16:15～16:30　休憩
16:30～17:00　クロージング・アンケート記入・未来博士号授与
17:00　　解散

・実施の様子

受講者間の距離を取る必要があるなど、ワークショップとしてよい雰囲気を作るのは容易でない状況になったが、事後アンケートなどを見ると、満足してもらえるプログラムとなったようである。

・事務局との協力体制

本学人文社会エリア支援室研究支援と緊密な連携のもとで本プログラムを実施した。また、日本学術振興会や本学本部からの見学もあり、児童生徒への科学の普及を教職協働で目指すことの一助となっている。

・安全配慮

本プログラムは人文系のワークショップを中心とするものであるため、実験や野外での観察のような危険は発生せず、今回は夏休みのような熱中症を心配する時期の実施でもなかった。しかし、実施日は新型コロナウイルス感染症の感染拡大時期に当たっていたため、当初予定より大きな教室に場所を変更した上で、換気を十分に行うなどの配慮を行った。

・今後の発展性、課題

かなりの数の参加者が発熱や濃厚接触者となったことで直前キャンセルとなり、開催直前はその対応で追われることになった。しかし、これはウィズコロナのひらめき☆ときめきサイエンスとしてはやむを得ないものと考えられる。特に、本プログラムは兄弟姉妹での参加も従来から目立っているが、一家で罹患し参加を断念する例もあった。これはスタッフも例外ではなく、補助を依頼していた学生が発熱により出校できなくなり、当日の運営に多少苦労するという課題も生じた。オンラインとの併用が解消策ではあるが、併用での実施には当然困難もあるので、当面の間はこのような事態の発生もやむなしとして極力安全に対面開催を行い、児童生徒への科学の普及を地道に行うよりほかないのではないだろうか。それでも、オンライン開催と比べれば対面での開催は参加する側にとっても実施する側にとっても満足度や充実感が高く、対面開催の大切さが改めて明らかになった。

特筆すべきは、参加が 3 回目となる参加者がいたことである。理工系の進路を考えているが、人文系にも視野を持ち続けていたいということであった。実施代表者は内容をアップデートしながら継続的にこのプログラムを実施しているが、このような知的体験のできる場が継続して存在することの重要性、ひいては次世代の科学技術を担う人材育成に向けて本事業が持つ大きな意義を、今後への発展性という観点から改めて実感している。

未来博士号授与後の記念撮影